

転生するために、資格が必要になった件

KEY (ドM)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様「転生するためには資格が必要になつたから」

転生者「えつ」

神様転生するため

目

次

1

神様転生するために

神様転生。

トラック、病死、自殺、ありとあらゆる死によつて
神のもとに送られ、別の世界への転生をさせられる
一連のお約束（テンプレ）である。

いつだつただろうか。

某、ゼロな使い魔のライトノベルによつて、
異世界への転移ものが流行りだしてから、
神様転生といった物語も人気を博してきた。

それから、ネット小説には自分の好きなように
主人公にチートを与え、ハーレムを築かせ、
思うがままに無双し、俺TUEEEEする小説、
作品が多く生まれてきた。

が、それが原因で神様転生は変わつた。



「えー。テスティス。」

壇上にあがる、真っ白な長髪と、豊かなひげを蓄え、
白のローブを身にまとい、スタンドマイクに向かつて
発生練習している一人の老人。

周りを見渡す。

皆、緊張した顔だ。

何百人の人間が、この白い空間にひしめき合つて

立っていた。

「あー。 . . . ハウリングがきつついのう。あ、めんべいめんべい。」

マイクの調子がようやく良くなつたのか、話始める男性。

「ようこそ。――死後の世界へ。」

俺は今、神様の前に立つていてる。

は？ 麻薬でも決めたの？と思われそうだがそうではない。
マジで神様の前にやつってきたのだ。
直感的に悟つてしまつた。

あが、俺たちの世界を作つて、見守つている存在なのだと。
動物園で初めてライオンを見たときに本能的に
自分では勝てないとわかつてしまつたあの感覚に近い。

そして、俺がここにいる理由は一つ。

死んだからだ。

そう、死んだ。

死んでどうなるのかは生きている間は知らなかつたが、
どうやらあの世というものに行くことになるらしい。
今、こうしているのがその証拠だろう。

いや、結構わくわくしたののだが。
だつてあれだぞう？

本物の神様と会えたんだぞ？

昔の神話とかに出てくる畜生な神様と違つて
常識的そうだし、お、これは結構いけるんじやないか？
と思ってこれから的生活に胸を含まさせていくくらいだ。

最低限の話を神様の使いである天使たちから受けて、
この場所で神様の話を聞くことになつた俺たち死人。

一体、何が行われるのか。

周りの奴らは「転生っ・・・!!」「ニコポ、撫でボは
必須・・・っ!!」「ハーレム!!」とかざわめいているが
やはり、神様転生に期待しているのだろうか。

無理もない。

創作物でしか見られない魔法や超能力、そして美少女たちとの
触れ合いができるかもしないのだ。

そして、神様は言つた。

「あの世に来て、神様転生したがる奴が多すぎるから
資格とつたやつだけにさせることにしたぞ。」

時が止まつたかのように、あたりが静まり返つた。



それからはもう大変だった。

神様転生をさせてくれると思つていたやつらが
壇上のおじいさんに殴りかかろうとして

周囲にいた天使に捕縛されてどこかに連れていかれちやつたし。

そこで、神様がその後に捕捉で説明してくれた。

なぜ、資格を取った人間だけが転生できるようにしたのかと。

『…………だつて、社会不適合者が多すぎるし……。』

一緒に帰つて噂されると恥ずかしいし……、みたいな
テンションで言われてしまつた。

何でも、神様転生して別の世界に行つたのは良いが、
問題を引き起こす輩が多すぎるとのこと。

『転生して別の世界に行つてからと言つてなんでもしていい
とは言つておらんぞ？ 最低限の常識もないような人間を
送るわけなかろう。』

すみません、俺も社会不適合者（元リーマンのニート）なんで
す……つ。

社会でまつとうに働いて生きることができなかつた自分の
過去を思い出すだけで死にたくなつてくる。
あ、もう死んでいるんだつた。

そして、転生するには現世で言う「職業訓練所」なる
ものに通つてもらうと。

…………あの、思つていたのと違うんですが。

自分の担当の天使さんにそういうと、ため息を吐かれながら

こう返される。

「あのですね、全く別の世界に行くつてことは、すなわち赤ん坊の状態で社会に放り出されてしまうようなものなのですよ？　本来、転生者に送られる特典というものは、転生者を守るためのセーフティーネットとして……。」

淡々と事務的に説明される。
ぐうの音もでない正論だった。



後日。

温かなベッドで一晩眠り、

体力を回復した俺は、「転生資格認定所」という場所に向かっている。

学校のようなもんをくぐり、体育館みたいな建物の横を通り抜け、学校に外見がそつくりな4階建ての建物の中へと入る。

4階のまで上がり、一番奥の教室までやつてきた。ドアに手をかけ、中に入る。

すでに、何人かやつてきているようだ。

黒板を見て、自分の机の位置を確認し、座る。

時間が過ぎていき、教室の中に人が集まつてくる。

30個あつた席が全部埋まり、
チャイムが鳴り響くとドアががらがらつと開けられ
中に誰かが入ってきた。

「皆さん、おはようございます。」

そういうつて壇上にあがり、ペコリと一礼する
銀髪、ポニーテールに釣り目、
OLが着て居そうな黒のレディースーツに
黒タイツ姿の女性だつた。

「さて、さつそくですがあなたたちには
転生するために必要な資格を取つてもらうために、
訓練してもらいます。」

どよよつ、と教室がどよめく。

ドン、と壇上の机を彼女が右手で
軽く叩く。

静まり返る教室。

「お静かに。・・・・・さて、あなたたちにお聞きしましょう。
神様転生の”特典”・・・。一体何を思い浮かべますか？」

当てられていく周りの人間たち。
意見を思い思に言つていき、それが
黒板に書かれていく。

一通りの意見が出尽くしたところで、
銀髪の女性が手を止める。

「こんなところですか。」

黒板に書かれた特典を見る。

ニコポ、撫デボ、王の財宝、UBW、悪魔の実、
ハーレム、魔力SSS、成長限界突破、最強、
チート、俺TUEEEE、踏み台、オリーシュ・・・。

うわあ、と両手で口を抑える。

なんか、こうして文字で客観的に眺めてみると
いたたまれない。

そして、女性は言つた。

「チート、大いに結構。ハーレム？女性を

傷つけなければ良し。原作介入？どうぞご自由に。」

何だか投げやりっぽい。

「あなたたちにこれらの特典を得られるチャンスを、
この『転生資格訓練所』では与えております。」

しん、と静まり返る教室。

俺も、口の中が緊張で渴いている。

・・・・マジで？

「それでは、さつそく講師の方に入つていただきましょう。」

がらがらっとドアを開けて入ってきた金髪に、黄金の鎧を身に着け

ている

超美形の美丈夫。

・・・ん？ん？

手で目をこすつて二度見する。

仁王立ちして、俺たちをじっくりと観察するような視線を向けてくる赤目の人物。

知っている。

おそらく、この教室にいる人間は全員この人物を知っている。

「それでは、自己紹介をお願いいたします。」

「・・・王たる我に命令するか。」

まあ、よい。

そして、にいittと口の端をつり上げ、俺たちの肝が底冷えするような声色で言つた。

「私は英雄王、ギルガメッシュ。さて、我の財宝に手を付けようという不届き者は誰だ？」

明らかに怒つてゐる表情で自己紹介する彼に苦笑いするしかなかつた。

◆

王の財宝を欲しがつてゐる人間を何回も殺し、

すつきりしたのか教室から出て行く彼。

30人いた人物が、残り11人まで減つてしまつた。

「ご覧のように。特典を得るために、

その能力をもつた人間から認められる必要があります。」

何事もなかつたかのようにな話を続けていく。

あ、さつきのスプラッタな光景を思い出しただけで
胃から・・・。

「UBWがほしければアーチャーに、サイヤ人の身体能力が
ほしければ孫悟空に、チートがほしければ、そのチートを
持つている相手を認めさせなさい。ゴミみたいな生活を
送つていたあなたたちクズには、もつたいないほどの
チャンスでしよう？」

転生は、樂じやない。

神様転生したいとか言つてゐる奴。
ちよつと來い。

終わり。